

# 外国語教育メディア学会 (LET) 第 95 回 (2020 年度秋季) 中部支部研究大会



## プログラム

日時 2020 年 12 月 13 日 (日) 10:30-17:00  
会場 オンライン (Zoom 使用)  
実行委員会本部：皇學館大学文学部  
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町 1704 番地

研究大会実行委員長 豊住 誠 (皇學館大学)  
実行副委員長 中川 右也 (三重大学)

主催 外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部  
後援 三重県教育委員会・伊勢市教育委員会



問い合わせ先：外国語教育メディア学会 (LET) 中部支部事務局  
支部サイト (<https://www.letchubu.net>) の「お問い合わせと原稿送信」  
からお問い合わせください

Twitter: @LETChubu

研究大会サイト: <http://bit.ly/LETG2020Autumn>



**参加申込締切は 12 月 10 日 (木) です**

## 日 程

9:30 受付開始 【Zoom Room 1】

10:00 賛助会員ビデオ放映 【Zoom Room 1】

10:30 - 10:40 開会式 【Zoom Room 1】

司会：工藤 泰三（名古屋学院大学）

主催者挨拶：高橋 美由紀

（中部支部支部長・愛知教育大学）

開催校挨拶：豊住 誠（皇學館大学）

10:45 - 12:10 講演 【Zoom Room 1】

司会・講師紹介：豊住 誠（皇學館大学）

講師：Christopher Mayo（皇學館大学）

### “Distance English” in the Post-COVID-19 Era: Educational Opportunities and Challenges

This presentation questions the supposed benefits that the long-awaited “disruption” or “revolution” in the educational sector was supposed to have ushered in with the widespread adoption of remote learning this year. It suggests that rather than abandoning conventional physical classroom methodologies to embrace virtual ones, we instead rethink mutually reinforcing relationships among the various tools at our disposal. The first part aims to extract insights from premodern historical precedents and apply them to English teaching in Japan today. The second part examines some exciting opportunities and worrisome trends that administrators, parents, students, and teachers have begun to glimpse not only in some of the ad-hoc responses to the pandemic but also in the carefully planned and executed virtual educational offerings. Finally, the third part looks ahead to next year and considers how we can better adapt to the post-COVID-19 educational environment.

12:10 - 13:30 昼食

12:40 - 13:20 ランチョンセミナー 【Zoom Room 1】

司会：工藤 泰三（名古屋学院大学）

- 株式会社 アルク (<https://www.alc-education.co.jp/academic/>)
- 株式会社 三修社 (<https://www.sanshusha.co.jp>)
- チェル株式会社・VERSION2 株式会社 (<https://www.chieru.co.jp/>)
- リアリーイングリッシュ株式会社 (<https://www.reallyenglish.co.jp/>)

**13:30 - 15:15 研究発表・実践報告**

**(1)13:30 - 14:00 (2)14:05 - 14:35 (3)14:40 - 15:10**

**第1室【Zoom Room 1】**

司会：近藤 泰城（三重県立北星高等学校）

(1) 日本人高校生による受動態の誤用分析【研究発表】

岡田 美穂子（名古屋大学大学院生）

(2) 非同期型遠隔授業のための折り紙タスクの作成とその活用【実践報告】

天野 修一（広島大学）

(3) 日本語母語英語学習者の産出能力の発達研究のための縦断的コーパス構築へ向けて【研究発表】

杉浦 正利（名古屋大学）・江口 朗子（名古屋女子大学短期大学部）・  
阿部 真理子（中央大学）・村尾 玲美（名古屋大学）・  
古泉 隆（名古屋大学）・阿部 大輔（中部大学）

**第2室【Zoom Room 2】**

司会：福田 純也（中央大学）

(1) シャドーイング活動における音声合成・音声認識技術の利用効果の検証【研究発表】

古泉 隆（名古屋大学）

(2) COIL型授業における異文化間コミュニケーションについて【実践報告】

山田 貴将（南山大学）

**15:20-17:00 シンポジウム 【Zoom Room 1】**

司会：中川 右也（三重大学）

**テーマ：「コロナ禍における授業実践：中学校・高等学校・大学の事例を基にアイデアを共有しませんか？」**

シンポジスト： 山本 永年（市川中学校・高等学校）  
中川 千穂（工学院大学附属中学校・高等学校）  
柴田 里実（常葉大学）

山本 永年「中学1年生：『英語を英語で学ぶ体験』と『生徒への配慮』」

英語を本格的に学び始める中学1年生に、対面での授業ができなかった年度当初、オンラインでも原則として英語で授業をすることはできないかと模索してきました。その過程で考えてきたことを共有させていただきます。

中川 千穂「Raise Independent Learners Online!：省察を促すオンライン英語教育」

Z世代の生活様式を最大限に活用し、自立した学習者を育成する授業実践をご紹介します

いたします。学びや活動を可視化することにより、学習者の省察を促し、生涯学習の礎を築く実践をお伝えいたします。

**柴田 里実「オンラインでのフィードバックの試み：ライティング・多読・英会話での事例紹介」**

大学英語教育で、オンライン授業を実施する中で、対面式となっても有効な形式や、保持された形式なども存在する。本発表では、オンラインだからこそできることに焦点を当て、フィードバックに関する実践例を提案したい。

**17:00 閉会**

(今大会は懇親会はありません)

## 発表概要

### 第1室【Zoom Room 1】

#### (1) 日本人高校生による受動態の誤用分析【研究発表】

岡田 美穂子（名古屋大学大学院生）

日本人英語学習者は\*The earthquake was happened のように自動詞の過度受動化の誤りを犯すことが指摘されている。このことから、Oshita (2001)は「非対格動詞誤仮説」を提唱した。この仮説は、英語の自動詞が主語の意味役割により非対格動詞と非能格動詞に分けられ、非対格動詞の習得は熟達度によりU字型曲線を描くと主張する。同時に、主語の有生性が態の選択に影響を及ぼすことも、様々な研究者が指摘している。

本研究は、日本人高校生約200人を対象にした態産出課題と態判断課題でのデータを用いて、動詞の種類、熟達度、主語の有生性の3つの要因に焦点を当て、当該仮説を検証した。そのため、統計ソフトRで一般化線形混合モデル(GLMM)の最適モデルを探し、3つの要因の単独効果や交互作用の結果を分析した。

#### (2) 非同期型遠隔授業のための折り紙タスクの作成とその活用【実践報告】

天野 修一（広島大学）

本発表は、COVID-19拡大防止のため、急遽遠隔で実施することとなった国立大学の教養英語授業において、動画を用いて実施した非同期型の折り紙タスクについて報告する。この試みは帯活動として実施されたものではなく、学期内の3回の授業の中の一部で実施された。第1回では、導入を兼ねた理解型タスク動画3本を使用した。学生は英語の指示を聞き、それに合わせて紙が折られる様子を見て、関連する語彙や表現を学んだ。さらに音声指示に合わせて紙を折ることに挑戦、完成したものの写真を提出した。第2回では、解説動画を見てフィードバックを得た後、難易度を上げた2本の理解型タスク動画に挑戦した。第3回では、紙が折られる様子のみが収録されている動画を見て、折り方の説明を考え、録音して提出する産出型タスクに取り組んだ。自由記述式アンケートによると、タスクの新鮮さが評価された一方、難易度のバラつきが改善点として指摘された。

#### (3) 日本語母語英語学習者の産出能力の発達研究のための縦断的コーパス構築へ向けて【研究発表】

杉浦 正利（名古屋大学）・江口 朗子（名古屋女子大学短期大学部）・  
阿部 真理子（中央大学）・村尾 玲美（名古屋大学）・  
古泉 隆（名古屋大学）・阿部 大輔（中部大学）

本研究は、英語学習の初期段階から基礎的な語彙と文法を習い終わるまでの中学3年間を通して縦断的に、語彙サイズと、スピーキングとライティングの産出データを収集し、日本語母語話者の英語習得過程を観察していくプロジェクトの一環である。今回予備調査として、横断的に3学年（同意を得た223名）を対象にデータ収集を行った。そのうち各学年6名計18名分のスピーキングデータを試験的に分析し、語彙産出量・発話長・語彙サイズなどを比較するとともに、処理可能性理論に基づいて発話の統語発達段階を確認したところ、学年進行に従いスコアの伸びが確認できた。一方で、タスクによる産出傾向の違いや、背景アンケートによる中学入学以前の英語学習経験の違いなど

も観察された。発表では、縦断的コーパス構築の設計に関する説明とともに、発達段階の測定方法やタスク要因・学習者要因など、試験的分析結果と本調査に向けての改善案を報告する。

## 第2室【Zoom Room 2】

### (1) シャドーイング活動における音声合成・音声認識技術の利用効果の検証【研究発表】

古泉 隆（名古屋大学）

本研究では、シャドーイング活動における音声合成・音声認識技術の利用効果を、リスニング、スピーキング、コロケーションの各テスト結果および事後アンケートをもとに検証した。実験では、大学生に参加してもらい、独自開発したスマホアプリ教材を用いて、従来型、音声技術利用型、折衷型の3群に分かれて、シャドーイング活動を行ってもらい、事前・事後テスト等を実施した。分散分析の結果、リスニングテストの得点については、各群ともに事前・事後で有意な伸びはなかった。スピーキングテストの得点については、4つの項目（文章構文、流暢性、語彙、発音）のうち、文章構文および流暢性において各群一様に有意な伸びがあった。コロケーションテストでは、各群で得点に有意な差はなかった。発表では、これらのテスト結果に加え、アンケートの分析結果を報告し、シャドーイングアプリ教材・学習における音声技術の有効な利用法について考察する。

### (2) COIL型授業における異文化間コミュニケーションについて【実践報告】

山田 貴将（南山大学）

筆者が担当するCOIL型授業である『国際産官学連携PBL C』では、連携企業から提供された「未来の車のカタチを提案する」というテーマについて、本学14名、香港中文大学24名の学生からなる7グループがオンラインで協働して取組み、最終的にプレゼンテーションという形で発表した。初回授業（全8回）では、企業からプロジェクトのゴールやスケジュールが提示された。第2回目の授業においてアイスブレイクを通じて参加者間の相互理解を深めた後、両校学生間の実質的なオンライン協働が開始された。各グループが、成果報告会（最終授業）でのプレゼンテーションに向けて週1~2回、ZOOMやLINEを用いて継続的な交流を行った。本実践報告においては、授業の(1)背景・目的、(2)概要、(3)授業内容について紹介した上で、本学学生から毎週提出されたCommunication Journalの記述を分析し、学生がオンライン協働する過程で経験した異文化コミュニケーションに係る気付きや問題点について考察する。

## 賛助会員ビデオ放映

株式会社 三修社 <https://www.sanshusha.co.jp>

チエル株式会社・VERSION2 株式会社 <https://www.chieru.co.jp/>

## 昼食

- 各自でお取りください。ランチョンセミナーもぜひご参加ください。

## 懇親会

- 今回は懇親会は開催いたしません。

大会参加申込用  
QRコード



## 大会参加のご案内

- ご参加には事前申し込みが必要です。12月10日までに Google フォームよりお申し込みください。URL は <https://forms.gle/2WMPfGbxSRhyUjLn7> です（右上の QR コードもご利用いただけます）。
- 発表者の方も参加申し込みをお願いいたします。
- 今回は会員・非会員とも参加費は無料です。
- 今回は Zoom を用いてオンラインで開催いたします。Zoom のミーティング ID およびパスコードは、参加申し込みをされた方に大会前日までにメールでお知らせいたします（ID・PC は Room 1 と Room 2 で異なります）。なお、ログインの際はお名前を本名の表示（漢字・かな、またはアルファベット）にし、発言されるとき以外はマイクを OFF にしてください。
- 発表者の方は、発表開始 5 分前までにご自身の発表会場となる Room にログインしてください。
- 発表時には画面共有機能を使うことができます。

以上

## 新規ご入会案内

- 会員になられますと、LET 全国研究大会、支部研究大会（年 2 回）での研究発表、実践報告、紀要への投稿などをしていただくことができます。
- LET 本部サイト（下記）にて入会登録をしていただくと仮会員になります。仮会員になられましたら、後日、年会費をご請求申し上げます。なお、年会費は次の通りです。

個人会員：年額 6,000 円 / 学生会員：年額 3,000 円 / 団体会員：年額 6,000 円

- 年会費をお支払いいただきますと、正会員になります（3 ヶ月以内にお手続きをお願いします）。

会員登録、会員情報の更新はこちらから  
LET 本部サイト：<https://www.j-let.org/>

